

今・むかひ新聞

第 11 号

令和 4 年 3 月

『語り継ぐ』



私達は過去の出来事や生活の様子を、歴史の教科書や小説などで知ることが出来ます。しかし、その時代に実際に人々はどのように感じ、どのように生きていたのか？直接聞かなければわからない部分がたくさんあります。今年私達は、ロシア・ウクライナ戦争という、映像を見ながらの劇場型の戦争体験を過ごしております。過去の太平洋戦争、今回の戦争体験を受けて人々の被る侵略戦争の悲惨さについて考えるため、語り部の方々が体験されたことを記録に残す必要を感じ、今・むかし新聞を今年も発行します。

『九十を越えた幸運』

高橋 雅雄

昭和五年芝区白金三光町、北里研究所近くに生まれて、昨年九十一才を迎えることができた。

稼業は祖父も父も植木職人。屋号は植春。裕福な屋敷の庭づくりや植木手入れに明け暮れていた。お蔭で私も動植物に親しみを覚え自然への関心は高くなり、一人っ子故に将来は、造園の道を継ぐのは当然と思っていた。



昭和十二年神応小学校へ入学。一学年は男子組、男女組、女子組の三クラスで、学校通いは毎日楽しかった。男子組の私は五年、六年と担任は武井春夫先生で、剣道を筆頭に柔道、体操、野球、バレーボールの時間は生き生きと楽しかった。その武井先生の御子息が今の武井雅昭区長とは、奇縁と言わざるを得ない。

三月十日の東京大空襲ではB29の焼夷弾で全焼。その時、我家も同じ運命を辿る結果となった。後に鉄筋コンクリートで再建された神応小学校の校庭に、父が植えたサクラの苗木は今や巨木となって春を告げる花を見ると、なつかしさがこみあげる。三月十日のB29からの焼夷弾が、あちこちにゆらゆらと火焰をまき散らし、それを都立八中二年生

の小生は、シヨベルで叩き消して廻った奮闘振りは今でも褒めてやりたい。また焼け跡の野菜づくりの肥料としての糞尿をリヤカーで母と運んだことも、今思うと胸に迫るものを感じる。

その頃中学生にも学徒動員の名の下に、軍需工場への動員が命じられ、西小山の日満工業という鉄工所で旋盤と呼ばれる金属工作機械を操作することになった。鉄材をタンガロイと呼ぶ刀先で、金属片を回転させながら精密な寸法に削るのだが、経験不足から合格品にするのは至難の業で不良品続出、申し訳なさで情けなさで、落ち込むことが多かった。日満工業も空襲で焼失、日本理化へ移った頃はグラマン戦闘機による、機銃射撃に身をすくめた。

やがて八月十五日、天皇陛下の玉音放送に、工場広場で耳を傾け、終戦を知った。以来今日まで幸運にも健康で九十才の峠を越えた幸福をかみしめている。

『変わりゆく歌曲』

池田 林太郎

戦時中と戦後に大きく変わったものは、沢山ありますが、歌曲もその一つに数えられます。

集団疎開で親元から遠く離れて生活する学童達は、家恋しい淋しさで、空腹を一時でも忘れるために夜の自由時間になると、男子は「軍歌」を好んで合唱しました。（若い血潮の予科練の七つボタンは桜に錨）（轟沈轟沈凱歌が上がりや）等々、陸海空軍のヒット曲を、空元気を出して歌いました。



しかし、女子は「古里」を想う歌を静かに歌いました。（恋しや古里、懐かし父母、夢路に辿るは故郷の家路）

それを聴くと、男子も女子も我家を思い出し、涙を浮かべる者、ふとんの中で忍び泣きする者、一同しみりとなりました。そして、晴れて戦後、新橋の桜田小学校に戻ると

世間は大きく変わり、流行歌も明るいメロディーとなり「リンゴの唄」が街に流れており、私達も耳ですぐ覚え口遊みました。また、「憧れのハワイ航路」「青い山脈」「銀座カンカン娘」等の軽快な曲がヒットする反面で、「東京の花売り娘」「星の流れに」等、苦境に落とされ人々を唄った曲も流行しました。

その後、アメリカの歌曲がジャズと共に進駐軍を通じて歌われるようになりました。

このように、歌曲は時代の移り変りに応じて、人々の心を映すものだと感じます。

現在は、平和を味わいつつ、あらゆるジャンルの歌曲を楽しんでいます。心の中では、再び、「軍歌」の流れる日々が来ないよう願っています。

『平和を願っていますが』

井上 繁



第2次世界大戦終了後、80年もの長い間、幸いなことに我が国は平和が保たれてきました。それだけに国民の殆んどが、自分たちは戦争とは無縁であると思ひ込んでしまっているようなところがあります。先の戦争後も、世界的な大戦争こそ無く済んではいますが、地球上で、戦火が絶えたことはありません。年表を見れば判りますが、数えきれないほどです。

地球上には80億もの人間が暮らしております。殆どすべての人が平和であることを願い、折に触れて祈ってもおります。祈りは尊いことです。だが現実を見る限り、祈りでは平和を招くことも、保つこともできないと言つことが出来ます。

多数の人々が祈ったとしても、時として大きな望みを抱いた人間が出現することを防ぐことはできません。この種の人間は自らの思いを達成する方法の一つとして、戦争を起します。戦争を始めた人間を明らかにすることは出来ず。だがそのような人物を非難し、除外するような手段が例え取ることが出来たとしても、その人物が関わったこの一件だけが終るに過ぎません。火種はいつでもどこにでも存在しているのです。

私たちは、ライオンや虎を猛獣と呼んでいます。しかしライオンや虎は自分たち同類と争つことがあっても、殺すまではしません。ですが、人間は人間を殺します。ライオンや虎よりも、遙かに恐ろしいのが人間です。

先の大戦では、我が国だけで300万以上の命が失われました。この結果から、誰かにその責めを負わせてみたところで、解決には至りません。このような事態を招くに至るのは、人間の性（さが）によるものだからです。私はこの地球上に人間が存在する以上、戦争を無くすることはできない、平和はあり得ないと思っております。

『子供の頃の記憶〜うどんと焼き』

武 恒雄

飯田橋の駅を出ると、すぐ神楽坂は登りになるが、赤城神社あたりまで、その先を少々下った牛込天神町に住んでいた。昭和十八年十九年の二年間、小学校三、四年のことだ。

この地がどんな所か子供には分かるはずはなく、お出掛けのお供とか、遊び場からハミ出したりで、よくこの坂道を往来した。



薄暗い路地の角に「うどん焼き」と書かれた提灯をぶら下げた屋台が出ていたのを覚えていた。喰い物屋だろうと見当はつくが、そのひょうきんな名が、頭に引付いたままになっていた。勘違いだったのか、見たことも聞いたこともないまま八十年過ぎてしまっていた。

最近、図書館の新村棚にあった、高見順著「故旧忘れ得べき」を借りて読み始めたら、「うどん焼き」が書き込まれているのに出会えて、古い記憶が繋がり、とても嬉しかった。

（うどん焼き・・・もんじゃ焼きから派生し、大正から昭和10年代にかけて東京を中心に流行現在は岩手・山形・富山等の郷土料理として現存）さて、それなら、今度は牛込区の小学校の先輩の作品にも挑戦してみるつもりになってきた。

『上野風景の変遷』

石井 知憲

アメ横で喫茶店を営んでいた叔母がいたので、もの心ついた頃より、ちよくちよく、上野界隈に遊びに連れて行かれました。子ども心に上野で印象に残る場所が、二カ所あります。

一つは、「博物館・動物園駅」です。当時、京成沿線に住んでいたため、上野に遊びに行くときは、博物館・動物園駅を利用しました。駅は、不忍池に面した地下にあります。上野恩賜

公園内でもあり、希少な武蔵野の草木を保存するために、1933年地下駅として利用開始されております。その名の通り上野動物園に行くには最短ですが、街中にできる利便性が悪く、4面の各駅停車しか止まらないこともあり、便数も徐々に減り、惜しまれつつ2004年廃駅になりました。不忍池前にある、今は封鎖されている入り口を見ると懐かしくなります。

もう一ヶ所は、「西郷さんの銅像の下階段」です。この場所は私にとって、時代を映す鏡のような場所です。

初めて通りがかったのは1965年頃でした。『もはや戦後ではない』と経済白書で記載された1956年より10年ほど経っていました。『傷痍軍人』・『戦地で負傷した体に残して帰還した軍人が、生活費を稼ぐため旧日本軍の軍服を帯姿で、アコーディオン・ハーモニカを演奏し、お金を受け取っていました。子供心に戦争の悲惨さ・深い傷跡を感じて、直視出来ませんでした。』



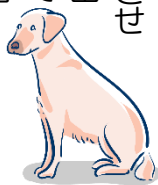
1990年以降、イラン・イラク戦争により疲弊したイランの人達が、バブル経済の日本で仕事を探しに4万人ほど来日しました。階段の下は職に就いた人達が、故郷の家族へ仕送るために無限に使える違法な偽造デジカメを販売していました。

この階段の下は、何故か人が引き寄せられる場所です。戦争の悲惨さ、人間の営みが反映している場所です。

『私の子供の頃の思い出』永坂町一番地

佐藤 すみ江

私は戦後一番大変な昭和23年4月に生まれました。母の弟達は大学生。子供を飢えさせるなど畑を作った。山の手空襲で焼け出された永坂町一番地の土地は畑として作物がよく育ったと叔父達は笑って言うていた。大学生だった叔父達は、自分で机や本箱を作り、仲間と良く我が家に来て、賑やかで楽しかった。



私と一才下の妹はドイツ大使館参事官の息子ロエル、まだ小さいキントモちゃんと大小屋でよく遊んだ。

特に私の妹はじいじとして本当に可愛かった。外国人が来ると妹をモデルにスケッチして下さったり外国語でよく話をして下さりました。辛い時、楽しかった麻布永坂町の事を思い出します。

人生で一番私にとって大きな慰めは、子供の頃の本当は大変なのに、楽しかった、優しい人に囲まれた生活の思い出が、今でも、大変な時に心の支えになっております。

『父の戦争体験』

佐藤 司

大正十三年一月十五日生まれの父正男は、七十七歳で亡くなった。その後、母も亡くなり遺品の整理をしていると、上田淳一郎著「太平洋の生還者」と言う本の間から、父の手書きのメモを見つけた。父の戦時中の年表のようなもので、この本を手にした父が自分の記憶を辿りながら整理して書き留めたと思われる。

- 昭和十七年三月 横浜海兵団入団 卒業
- 昭和十七年十一月 海軍 港務部巡邏
- 昭和十八年二月 第五呉衆船拜命
- 昭和十八年三月 ラバウル島・トラック島
- 昭和十八年四月 エンタビー島・パラオ島 兵員輸送

十八歳四ヶ月で出征、半年間の教育・訓練を経て十九歳になってすぐに、南洋戦線に送られ、兵員・資材等の輸送任務にあたった。

- 昭和十九年 一月トラック島敵艦戦機 来襲 連続 二カ月
- 昭和十九年三月サイパン島帰港 敵艦隊二包囲 常態二有り
- 昭和十九年六月十四日 撃沈 本艦
- 同島上陸し戦隊二参加、約二十日間攻防
- 七月七日 最後ノ総攻撃 手榴弾
- 以後敗残兵 シヤングル作戦
- 七月二十四日 同島東海岸漂流中捕虜二ナリ、サイパン・ガラパン収容所へ

戦況が悪化する中、サイパン島帰港中に攻撃を受けて本艦が撃沈。そのためサイパン島に上陸、戦隊に編入される。そして、サイパン島の玉砕まで行われた最後の戦闘（六月十八日〜七月九日までとされる）に参加する事となる。メモ中にある七月七日の最後の総攻撃は、（アメリカ軍側では、バンザイ突撃と称されていた）残された戦力で行われた最後の組織的攻撃だが、別の資料等によれば、残存部隊は陸海軍、警防団員、青年団、その他一般邦人も入り混じった混成部隊で、およそ三千名であったが、武器の無い者も多く棒に銃剣を結び付けたものや、石だけ持っただけの者もあったとある。

父は兵士だったので、まさか武器無しでは考えられないがメモにある「手榴弾」とは兵士が一つずつ持たされた最後の自決用だったのでは？と想像する。そしてサイパン玉砕という最も過酷な戦闘に実際に父が参加していたという事をこのメモを見て初めて知った。

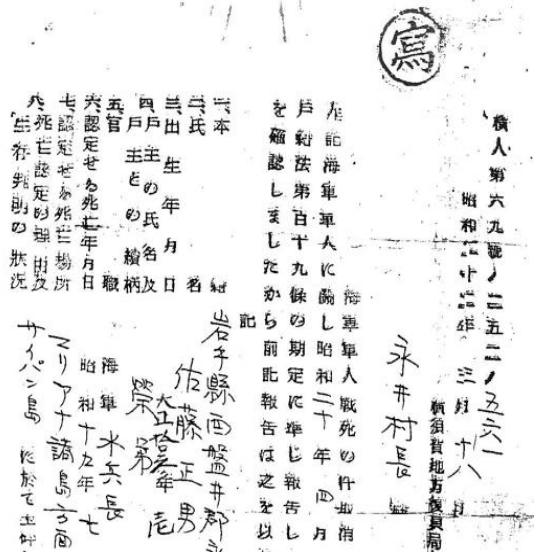
父が戦争に行った事は知っていたし、サイパンの海で漂流中、捕虜になり、戦後帰国すると、自分は戦死した（七月八日死亡認定）事になっていたという程度の話以外、詳しく話を聞くことは無く、母も同様であったようだ。母が父から聞いていた戦争の唯一の話が「喉が渴いた時、草木の葉に付くしずくをすすって渴きをいやした」というのは、この戦闘中の事だと思ふ。父が戦地での話をほとんどしなかった理由は、サイパン島玉砕の生き残りとして、戦死した戦友に対し申し訳無いと思い、そしてわずか二十歳という年齢で見えしまった様々の悲惨な戦場の様子を思い出す事はもちろんの事、口にする事はさらに苦痛であったためだと思う。

- 昭和二十二年二月二日 布哇（ハワイ）より 生還帰国

サイパン島から数カ所の収容所を移動した後、ハワイから帰国する。二十三歳になっていた。そして三月十八日付で、村役場から戦死公報取消の通知が届き、本当の意味の生還が確定した。

父が、生き延びてくれたおかげで、今の自分がある。『良く生き抜いてくれた』と、今さらではあるが、心から感謝している。

海軍軍人戦死の件取消 抜粋



『語り部Kさん』

木曾 久美子

毎月第二と第四水曜日午後二時から開催される「

語り部」の学習会、その会に出席するのを何より楽しみにされていました。コロナ禍で自主学習会となつてからも、熱心に通つて下さり、学習会の二時間は、いつもKさんの独壇場でした。Kさんが語られるお話は、『学生時代に通った浅草のお話』『感銘を受けた本』『大切な友人』『学徒動員の話』『政治について』『東京オリンピックにまつわる話』『母校の大学で学生向けにオンライン授業をした事』『銀座の思い出』『大好きな野球の話』『日々の生活の知恵』『母校の話』等など、そのお話はいつも彼自身の言葉で語られ、学習会に参加される誰もがその話を聞くのを楽しみにしていました。

そんなKさんが、小学校への出前授業や平和青年団との交流会で語っていた言葉「戦争は絶対いけません。人を殺したら犯罪だけど、戦争では英雄になる。敵味方と別れていても、付き合っていたら、本当は一生の友となれたかもしれない。絶対に戦争はいけません。」と強く語られていました。心に沁みる言葉です。

Kさんはよく「僕は死ぬのは怖くないんです。でも、100年後の世界には興味がある。世界がどんな風になつたかは見てみたい。」とおっしゃっていました。今の世の中、どんな風に思われるか、私たちこそ、Kさんのお話を聞きたい、今、強く思います。

はるーんの『語り部』こどもあじふ。

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。平成十五年度からは、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

さらに平成二十八年からは、港区平和青年団の事前研修の一環として、高校生の皆さんとの交流会を行い、少しでも戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えるべく活動しています。地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

ぜひ、興味のある方は、はるーん「語り部」担当までご連絡ください。

発行・問合せ

住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十八-三
電話 03-3431-1606 FAX 03-3431-1619
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（はるーん）